舞い降りた黒き牙

クリムゾンMO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
舞い降りた黒き牙

【Ｎコード】
Ｎ５６８３Ｘ

【作者名】
クリムゾンＭＯ

【あらすじ】
仮面ライダーキバと恋姫のクロスオーバー作品です。
初めて作った作品なので駄文です。
評価してくれたら嬉しいです。

黒い牙

???「まずい～!、このままじゃあ遅刻する～!!」
一人の青年が夏の暑さで熱のこもったアスファルトを全力で走っていた。　彼はいつもなら早々に起きて余裕を持って学校に向かうが、今日はいつもと違い遅めである。
彼の名前は紅　一刀、聖フランチェスカ学園の学生である。
一刀「何で起こさなかったんだよ!?」
彼は近くに飛んでいる黒い蝙蝠に叫んだ。
???「仕方ないだろう、時計が壊れていたのだから…」
彼の近くを飛ぶ蝙蝠が疲れたように言う。
この蝙蝠の名前はキバットバット二世
通称ダークである。
ダーク「お前も少しは成長してほしいものだ…」
一刀「うるさい～!!」
青年と蝙蝠は先進んで行く、真っ直ぐ、ただ真っ直ぐに…。

闇の牙降臨

一刀「結局間に合わなかった…」
　ドヨーンとした空気をまとった一刀がぼやいた。結局間に合わなず先生に説教されてしまいずっとこの調子である。
ダーク「自業自得だ…」
呆れたようにダークもぼやく
一刀「…でもこれが人間の生活なんだよな…」
　先ほどとは違い悲しげにつぶやく。
一刀「弟の言った通りだったな…、人間と暮らすのも悪くない。」
ダーク「昔の俺達では考えられなかったな、人間と共存するなどと。」
　彼は思い出す、過去に人間との共存を目指し自分たちを打ち負かした少年を。
　ダークは見てわかるが、一刀も人間ではない、彼は正真正銘の純粋なファンガイアである。
過去の一刀は、人間は自分達のエサに過ぎないと思っていた。
しかし、彼の弟が人間との共存を目指し自分達を打ち負かしたことで一刀は王の座を弟に譲り、人間の中で生活していた。　一刀「帰るか…」

　その夜買い物を行こうとスーパーに向かっていた一刀はぼやいた。
一刀「この服やっぱり目立つな…」
今の服は王の時に着ていた黒い衣である。
何故かザンバットソードも装備している。
最も人間には見えないが　　ちょうどフランチェスカ学園の前を通ったときだった。
ガシャアアアン！！！！
一刀「なんだ！！」

慌てて周りを見渡す一刀ダーク「あそこだ！」
　白い服を着た男が鏡を持って走ってきた。
一刀はその鏡に見覚えがあるのに気が付いた。
一刀「あれは資料室にあった！」
急いでその男を追う。
ダーク「一刀、任せておけ！！」
ダークが白い服の男に攻撃する。
？？？「ぐっ！！」
男が怯む
一刀「追い付いたぞ、その鏡を帰せ！」
？？？「貴様ァ…また俺の邪魔をするのか、北郷一刀！！」
一刀「北郷だと？それに何をいっているんだ貴様？」　一刀は北郷の事も気になったが、また邪魔をするのかという言葉に引っ掛かった。
？？？「大丈夫ですか左慈！」
　別の方向から眼鏡を掛けた男が現れた。
左慈「于吉か…、銅鏡はてに入れた、後はこいつを始末するだけだ！！」
そう言ったとたんに一刀に攻撃を仕掛ける。
しかし
一刀「…遅い！」
ザンバットソードで左慈の攻撃を防いだ。
于吉「バカな！？北郷一刀ごときに、人間ごときに左慈の攻撃を防がれた！？」
ダーク「残念だったな、我が友よいくぞ！！こいつらには容赦をするな、あの銅鏡から何かしらの力を感じる。」
ダークが一刀に叫ぶ
一刀「フッ任せろ！ダークいくぞ！！」
一刀の腰に鎖が巻き付き黒いベルトが現れる。
左慈「なんだあいつから感じる力は！！」

ダーク「有り難く思え…」　「「絶滅タイムだ！！！！」
一刀の腰に巻き付いたベルトにダークが装着される。身体中にステンドグラスのような模様が現れそれがいきなり割れる
黒い蝙蝠のような鎧を着けた戦士がここに誕生した。

闇の牙降臨（後書き）

前回も短かったですが今回も短いです。
感想ありがとうございます！
また送ってくれたら嬉しいです。

外史への扉

月の明かりに照らされ闇の戦士は剣を構える。

一刀「その鏡を返して貰おうか。」

左慈「な、何だその力は！！人間ごときに扱える力ではないはずだ！！」

于吉「その通りです！北郷一刀ごときにそんな力はなかったはず…」

一刀「誰と何を勘違いしているか知らないが、俺は北郷なんて名前じゃあない。俺の名前は紅　一刀だ正真正銘の化け物だよ…」

一刀は皮肉げに笑う。

一刀「とにかくその鏡を返せ、返さないと言うなら…」

ザンバットソードを二人に向けて言いはなつ

一刀「力ずくで返させてもらうぞ！！」

左慈に向かって驚異的な速さで斬りかかる。

左慈はかろうじて反応するが、避けきれずに斬激を喰らう。

左慈「ぐはぁ！？」

于吉「左慈！？」

ダーク「余所見をしている場合か？背中ががら空きだ！」

于吉「ガハァ！？」

于吉の背中に容赦のなく拳を叩き込む。
于吉は道路の上を転がりながら吹き飛ばされる。
一刀「終わりだ…」

一刀が腰に着いたウェイクアップフエッスルにてを伸ばす。
その時だった、左慈の持っていた銅鏡から光が溢れでてきたのだ。

ダーク「グッ、何だこの光は！？」

左慈「今ここで殺されるわけにはいかない、貴様には新たな外史に行ってもらう。」

左慈の持つ銅鏡の光が強くなる。

一刀「新たな外史だと！？どうゆう意味だ！！」

ダーク「グッ、不味い一刀変身が…」

ダークの悲痛な声が聞こえた瞬間、変身が強制的に解除されてしまう。

一刀「ダーク！くそ何だこの光は？徐々に引き込まれて行く…！」

一刀の言う通り徐々に引き込まれているのだ。
抜け出そうとするが引き込む力が強くなり、抜け出すことができずにいる
左慈「ふん、北郷…いや紅　一刀！外史の世界で無様に死に絶えるがいい！！」

一刀＆ａｍｐ；ダーク「うわあああああ！！」
一刀とダークは光に飲み込まれていった。

―とある外史
曹操ｓｉｄｅ

秋蘭「華林様、お耳にはさんでほしいことがございます。」
華林「あら、いったいなにかしら？と言ってもだいたいは想像がつくわね。」
秋蘭「はい、華林様もお聞きになられている思いますが天の御遣いにの事です。」
春蘭「天の御遣い？何だそれは？」

華林「最近民の間で噂になっている予言に出てくる人物よ。」
今この場には魏の英雄達が揃っていた。
と言ってもまだ三人しかいないので会議をやっているように見えないが…
華林「それで秋蘭天の御遣いの事でなんなのかしら？」
秋蘭「はい。先ほど菅輅と名乗る占い師から天の御遣いについての詳しい予言を聞いたので、その報告を。」
春蘭「どのような予言なのだ？」

秋蘭「それは――――」

曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

劉備ｓｉｄｅ

桃香「愛紗ちゃんー！、鈴々ちゃんー！、大変だよー！！」

大きな胸を揺らしながら走ってくる少女

急いでやって来たのか少し息切れをしている。

愛紗「どうなさいましたか桃香様！」

鈴々「何があったのだお姉ちゃん！」

少女の慌てように驚く二人。

桃香「うん、それがねさっき菅輅っていう占い師の人が天の御遣い様の予言をしていたの！」

愛紗「それは本当ですか！？」

今この時は、天の御遣いの事は噂にはなっていたが、正確な予言は出ていなかった。

そして彼女達は、天の御遣いの事をある事情で探していた。

なのでこの予言はかなり重要な事なのだ。

愛紗「それでどんな予言なのですか？」

桃香「うんそれはねーー」
劉備ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

孫策ｓｉｄｅ

祭「おーい、策殿ー！、どこにいるんじゃー！」

冥淋「祭殿、あのバカは見つかりましたか…？」

祭「い、いやまだ見つかっておらんのじゃ。」

先ほどから誰かさんの名前を読んでいる女性は、彼女の出す憤怒のオーラにビビりながら答える
この二人は呉の国の王を支える重鎮達なのだが、そのかんじんの王がいないのだ。

雪蓮「祭～、冥淋～、大へん、よ……失礼しました！」

冥淋「雪蓮～貴女仕事もせずに何処に行っていたのかしら～」

今この怒られているピンク色の髪をした女性が呉の国の王孫策である。

雪蓮「ごめんなさいー、それよりも聞いて冥淋、大変よ。さっき菅輅っていう占い師からこんな予言を聞いたの。」

冥淋「ほう、どんな予言なのだ？」

雪蓮「それは――」

孫策ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

――その者、漆黒の黒衣と選ばれし王が持つ黄金の剣を携え乱戦をの世を救いし者なり。

とある森に一つの一軒家があった。
そこに一人の少女が暮らしていた

???「詠ちゃん達大丈夫かな…」

少女は悲しげな声を出す
???「私が頼りないから皆に迷惑がかかっちゃうのかな…」

少女は家の外に出る。
今は夜中で星が煌めいている。少女は目を閉じて願った。

???「お願いです。どうか詠ちゃんをみんなを…私達を助けてください…」
少女は願う、夜空に光る星に

???「…あれ？」

その時少女は流星が流れているのに気付いた。
その流星がだんだん此方の方向に近ずいているのだ。
ついに流星は少女の目の前までやってきた。

???「へ、へぅー!?」

少女はよくわからない言葉言い流星の眩しさに目を閉じる。

ドゴン!!!!

何やらすごい音がしたので恐る恐る目を開ける
そこには、漆黒の黒衣を纏い、黄金の剣を携えた一人の青年が倒れていた
???「だ、大丈夫ですか!?」

一刀「ぐっ、此処はいったい?」

この二人が出会ったのは運命だったのかもしれない。
青年と少女が出会った事によりこの世界の歴史は大きく狂うことになるのは、まだ誰も知らない…

外史への扉（後書き）

感想又は指摘があったら言って下さい。

闇の天の御遣い（前書き）

少し遅れてしまいました。　ご都合主義がありますがどうぞ

闇の天の御遣い

一刀ｓｉｄｅ

いきなりあの左慈と言う男に飛ばされた一刀。
目を開けた瞬間、地面に落ちている事に気付く。
一刀「ってヤバイー！！　このままだと死ぬー！！　どうする俺、どうするんだ俺ー！！」

パニックになるが結局落ちてしまうしかも頭から
一刀「あだぁ！？」

おもいっきり頭を打つ一刀、しかし其処は主人公、ご都合主義で怪我のひとつもない。

一刀「ぐっ、此処はいったい？」

痛みに耐えながら辺りを見渡す。
ふと前を見ると其処には綺麗な服を着た少女がいた。

？？？「へ、へぅ～」

一刀はよくわからない言葉を言う少女に声を掛けた

一刀「すまない、幾つか聴きたいことがあるんだが少しいいかい？」

？？？「は、はいなんでしょうか！」

一刀「此処は何処？」

？？？「えっ、えーと此処は酪陽の近くの森のなかです。　あの私も聴きたいことがあります！」

一刀「何だ？」

？？？「あなたは何者何ですか？　何で空から落ちてきたんですか！？」

一刀「（空から落ちてきただって？　それに俺はさっきまで学園の近くにいたはずだ。それに酪陽とゆう場所……）すまない詳しく話を――」

ダーク「おい！！　一刀！　いい加減その足を退けろ！　おれを踏むな！！」

一刀「うわ！　すまないダーク気付かなかった」

ダークが一刀の足の下から這い出てくる。
最近なんだか影の薄い蝙蝠なのであった。

？？？「えっ！？　蝙蝠が喋った！？」

一刀「ああ、すまない驚かしてしまったな。
まだ名前を名乗ってなかったな、俺の名前は紅　一刀だ。」

ダーク「俺の名前はキバットバット二世だダークと読んでくれ。」

？？？「私…董卓って言います…」

一刀「董卓？　（何処かで聞いたような…）」

注意！！　この一刀君は三國志をあまり知りません。

董卓「はい…信じられないかも知れませんが…」

一刀「どうゆう意味だ？」

董卓「えっ！？　知らないんですか！？」

一刀「なにがだ？　それにさっきからどうして自分の名前をいうたびに悲しそうな顔をするんだ？」

董卓「…それは…私のせいでみんなに迷惑をかけているから…」

董卓は説明しはじめた。　自分が酪陽を治めていたことを、それを十常寺達に利用され、自分を人質にとり自分の仲間を民達を利用していることを話した。

それを聞いて一刀は…

一刀「腐ってやがる…！！　こんな可愛い子を利用しようとするなんて…！！」

董卓「か、可愛い／／／」

一刀が怒りに震えている隣で董卓が顔を赤くする

一刀「どうして人間は同じ種族同士でいがみ合うんだ…？」

ダーク「まったくだな…同じ種族同士は協力し合うそれが出来ぬ種

族は何故滅ばないのかが不思議だな。」

一刀とダークは人間のやる事に理解できずにいた

董卓「あっ、あの！」

一刀「えっ？」

董卓「貴方は優しいんですね。」

一刀「なっ、いきなり何を言い出すんだ！？」

いきなり言われた言葉に驚いてしまう。

董卓「だって貴方は私のために怒ってくれた。自分の事より他人の事を考えてくれる人が本当に優しい人だって母様が言ってましたから」

董卓は笑顔で一刀のてを握りながら言った。

一刀「…そんなことはないよ…そんなこと……」

一刀は昔人間を無差別にライフエナジーを吸いとっていた過去を思い出してしまう。

一刀「優しいのは君のほうだよ、自分が今こんな状態なのに仲間達の事を考えているんだから。」

董卓「ありがとうございます一刀さん。」

笑顔で言葉を返す董卓に一刀は思う

一刀「（董卓ちゃんは他の人間とは違う…本当に皆の事を思っている…）

董卓ちゃん」

董卓「は、はい！　なんでしょうか？」

一刀「俺は君を助けたい」

董卓「えっ…？」

一刀「俺は君を助けたいんだ。君は周りの人を幸せにできる人間だと俺は思う、自分よりも他人を心配するそうゆう人が誰よりも幸せになるべきだと思うんだ。」

一刀は自分の思った事を言った。

董卓「いいんですか…本当に…？　私幸せになってもいいんですか……？」

董卓は目に涙をためながらすがるように聞く

董卓は皆と離ればなれになってしまい一人になってしまった。

隠してはいたが本当は寂しかったのだ。

董卓「私は皆と一緒に居たいです！　また皆で仲良く一緒に暮らしたい！　だから…助けてください！！」

本心をぶつける董卓を一刀はそっと抱き締める。　昔に母にやって

もらったように…

一刀「勿論だよ君は俺が必ず助ける！」

暫くして一刀から離れる董卓

董卓「あっ、あのすみません服を汚してしまって／／／」

一刀「いいんだよ、気にしなくていいよ（ニコッ）」

董卓「へ、へぅー／／／」

（間違いなくフラグがたったなこれ）ｂｏｙ作者

一刀「ん、今なんか変な電波が来たような…？」

ダーク「何を言い出すんだお前は…？」

董卓「あっ、あの！」

一刀「えっ、なんだい？」

董卓「どうか私の真名を受け取ってください。

私の真名は月です。」

一刀「真名…？」

董卓「真名を知らないんですか！？　真名は神聖なものであり自分が心を許した人しか名乗ってはいけないんです。もし勝手に名乗ったら問答無用で首を切られてもおかしくありません。」

一刀「なるほどね…、じゃあ此れからよろしくね月ちゃん！」

月「はい！」

こうして闇の王と優しき少女は出会った。
二人は助け合いながら道を進むだろう…
だがまだ一刀は気づいていなかった、此処が三國志の世界で過去だということを……

運命の出会い（前書き）

急いで書いたのでクオリティが低いかもしれません。

運命の出会い

荒野。
それは読んで字のごとく荒れた野原である。あのケツを丸出しにする五才児の名字では決してない。その荒野に二人の人影が見える。一人は、黒い衣と黄金に光る剣を携えている。もう一人は、高そうな服を着た少女である。まあお分かりになられていると思うが一刀と董卓である。

一刀「月ちゃん大丈夫かい？　疲れてない？」

月「はい！　大丈夫ですよ一刀さん。」

一刀は董卓をあの森から出て洛陽に行こうとした。しかし此処で問題が起きた。

一刀「此処は何処だろうね…？」

月「すみません…わかりません……」

二人とも洛陽の場所を知らなかったのである。
董卓は政治の仕事はこなしていたが、流石に洛陽周辺の地理は全く知らなかった。一刀は何故荒野ばかりなのかとても不思議に思っていた。洛陽なんて町は一刀は聞いたこともなくダークも知らなかった。最後の手段としてキャスルドランを呼ぼうとしたのだがフエッスルが全く反応しなかった。

一刀「（此処はいったい何処なんだ？　見覚えのない景色ばかり、おまけにキャスルドランも出てこない…、それにあの時奴らが言っていた新たなる外史っていったい…？）」

月「一刀さん？　どうかしましたか？　とても難しい顔をしていましたよ。」

一刀「えっ、ああすまない少し考え事をしていてね…（今はそんなことはどうでもいいか…、俺が今やることは月を幸せにすることだ、たとえこの力が破壊の力だとしても必ず助けて見せる！！）」

一刀は決意する。たとえ此処が何処かわからなくても、関係ない、必ず月を助けると決意する。
その時だった

？？？「おい！！　其所のお前ら！！」

月「えっ！？」

一刀「ん…？」

一刀と董卓は振り向く其処には三人の盗賊らしき風貌の男がいた

「おい、其所のお前、その剣をよこしな」

一刀「なに…？」

「アニキが寄越せっていってるんだ早く寄越しやがれ！！」

「そ、そうなんだな早く寄越すんだな…」

月「か、一刀さん…」

董卓が震えながら一刀の服にしがみつく

一刀「大丈夫だよ、月ちゃん。俺に任して。」

月「で、でも危険です！！」

一刀「月ちゃん、俺は君を守るって約束したんだ。安心して、俺は約束は絶対に破らない。」

月「あっ…」

一刀は董卓を優しく振り払い男達にザンバットソードを向けた。

一刀「悪いがこの剣は渡すわけにはいかない、この剣は王と選ばれたものにしか扱えない、それにこれは我が一族の秘宝なのでな貴様らにはもったいない」

一刀は殺気を三人に向けて言いはなった。

「「「「ひ、ひぃ！！」」」」

三人は一刀の殺気におじけずいてしまった。

そんな三人を見て一刀は

一刀「失せろ…クズが」

「「「は、はいぃぃー！！」」」
一刀は殺気を消すと董卓に話しかけた。
一刀「大丈夫かい月ちゃん？」
董卓はさっきまでの凄まじい殺気が一瞬でなくなった事に驚いていた。
董卓は呂布などの武将の殺気を感じたことはあるが一刀の殺気はそれとは全く違うものだった。
月「だ、大丈夫です。」
董卓は返事を返して一刀に近寄ろうとしたときだった。
？？？「まてぃ！！」
急に赤い槍を持った女性が現れて叫んできたのだ
？？？「貴様が最近この辺りで悪事を働いている賊だな！！　この私が成敗してくれよう！」
一刀「何を勘違いしているんだ？」
月「へ、へぅ～」
二人は困ってしまった。　恐らく賊とはさっきの三人組の事だが一刀が追い払ってしまったのだ。
そうとは知らず女性は槍を構える。おまけに

???「ん、貴様そこの少女を何処からさらってきた！」

このような勘違いをしてしまったのである

一刀「いや、月ちゃんは――」

???「問答無用！！　我が名は趙雲！　我が槍の錆となるがいい！」

これが一刀と董卓のとある武将との初めての出会いであった。この出会いも本来の歴史ではあり得ず、この出会いは一刀と董卓の運命を大きく変える出会いとなるのである

運命の出会い（後書き）

次回予告！

「食らうがいい我が槍の一撃を！！」

「ぐっ、俺の話を聞け！」

「へぅ～、止めてください」

ぶつかり合う二人、そして

「止めてください星！」

「星ちゃんは勘違いをしていると思うのですよ。」

新たに現れる二人の女性

この出会いは未来にどのような影響を及ぼすのか

ウェイクアップ！！

運命の鎖を解き放て！！

闇とゆう名の正義

前回までのあらすじ

一刀と董卓は洛陽を目指していたが、途中で三人の盗賊に絡まれる。
追い払ったがまた新しい人影が……

趙雲「さぁ我が槍の一撃を食らうがいい！」

趙雲が朱槍を一刀に突き刺す。

一刀「ぐっ！　話を聞け！」
一刀はザンバットソードで受け止める。

一刀「話を聞かないと言うのならば…力ずくだ！！」

趙雲「ほう…、挑むところだ！！」

月「へぅ～、止めてください～」

一刀と趙雲は各々の武器を構える臨戦体勢を取る。
しかし

???「止めてください星！」

???「星ちゃんは勘違いをしていると思うのですよ。」

新たに二人の女性が現れたのだ

???「彼は賊ではありません！　黄色い頭巾をしていないでしょう！」

趙雲「ん…、確かにそうだな。」

趙雲が槍を納める。

一刀「はぁ、どうゆう事か聞かせてもらおうか？」

郭嘉「申し訳ありません。私の名は郭嘉です。」

程イク「風は程イクと言うのですよ～」

一刀に二人は挨拶を返す。

趙雲「申し訳ござらん。さっきも名乗ったと思うが私の名は趙雲だ。」

一刀「俺の名は紅　一刀だ。」

一刀も自己紹介をする

だが董卓は名前を言うことができない。なので董卓はこう名乗った。

月「わ、私の名はとんとんって言います！」

一刀は心の中でそれはないだろ…と董卓にツッコム。

趙雲「先ほどは申し訳ない、賊と間違えてしまった。」

一刀「いや、気にしていないから安心してくれ。」

程イク「お兄さんは心が広いですね～。」

郭嘉「それより気になったのですが変わった服と剣ですね？」

一刀「ああ、この剣は選ばれし王にしか持てぬ黄金の剣、ザンバットソードだ。」

趙雲「ほう…選ばれし王しか持てぬ剣か…。」

ダーク「人間が興味本意で持たない方がいいぞ、その剣はそんなに優しい剣ではない。」

郭嘉「蝙蝠がしゃべった！？」

ダーク「失礼な、俺は蝙蝠ではない。俺の名はキバットバット二世、一刀の友だ。」

三人はダークを見て驚いてしまう。

程イク「お兄さん、貴方は天の御遣いではありませんか？」

一刀「何だそれは？」

月「天の御遣い？」

二人は首をひねる

趙雲「なるほど、この者が天の御遣いか…。確かに予言と同じ格好をしているな。」

郭嘉「詳しい話は近くの町で話しましょう。」

一刀と董卓は三人と共に近くの町に行くことにした。そこで詳しい話を一刀と董卓は聞こうと思っていた。

―町―

一刀「なるほど…天の御遣いか…。確かに俺の容姿と一致するな。」

月「一刀さんが天の御遣い様…。」

一刀と董卓は三人から天の御遣いについて詳しい話を聞き驚いていた。

一刀「（なるほどな…、見覚えのない所ばかりだと思っていたがまさか過去に来ていたとは…。
いや異世界ということもあり得るか…。」

一刀はいままで疑問に思っていた事がやっとわかった。

趙雲「さて貴方はこれからどうするおつもりですか？　天の御遣い殿」

一刀「一刀でいいさ、此れからってどうゆう事だ？」

郭嘉「それは貴方は予言通りにこの世を乱世をおさめるのか？　ということです。」

三人は一刀を真剣な目で見ていた。理由は、今の世は荒れ果てていて人々は救いを求めている。三人も自分が使えるべき主を探していて旅をしているのだ。

一刀「俺にはある人を救わなければならない。だから俺は君達の期待している天の御遣いにはなれないだろうな…。」

程イク「お兄さんは誰を救うのですか～？」

一刀「…その答えは洛陽にある…。」

三人はその言葉を聞いて驚いた顔をする。言葉の意味に気づいたようだ。

郭嘉「ほ、本気ですか！？　何故あのような人を救うのですか！！」

一刀「…あの場所にいるのは本物の董卓じゃあない。本物は今…こ

こにいる…。」

三人「「「！！！！！」」」

月「……」

三人は一斉に董卓の方を見る。董卓はなにも言わずにうつむいている。

一刀「俺は月ちゃんを…董卓を救う絶対に…！」

趙雲「…なるほど、貴方は私の主にふさわしい人だ。」

一刀「えっ？」

趙雲「一刀殿…私の真名を受け取ってくれませぬか？」

郭嘉「星！？」

程イク「お兄さん、私の真名も受け取ってくれませんか～？」

郭嘉「風まで！」

程イク「廙ちゃんも本当はお兄さんの事を認めてるんじゃないんですか～？」

郭嘉「そ、それは…」

程イク「素直になった方がいいですよ～。」

郭嘉「はぁ～わかりました一刀殿私の真名も受け取ってください。」

一刀「いいのか？　真名って神聖なもなんだろう？　それに俺に使えるって事は董卓に味方するって事になるんだぞ、それでもいいのか？」

趙雲「構いませぬ。それに偽物の董卓を倒すということは、洛陽の民を救うことにもなるのですから。私の真名は星です。」

程イク「風は風と言うのですよ～。」

郭嘉「私の真名は廩と申します。」

三人は一刀と董卓に真名を預けた。

月「ありがとうございます皆さん私なんかのために…」

一刀「月ちゃんもう君は一人ぼっちじゃあないんだ此れからは俺達を頼ってくれ。」

月「はい！！」

一刀は新たな仲間をてに入れる。
彼女らは本来なら魏と蜀で活躍した英雄である。この出会いは未来に何をもたらすのか……？

闇とゆう名の正義（後書き）

また誰か仲間にしたいキャラがいれば感想に書いてください。

大きすぎる力（前書き）

遅くなりました！
短いですがどうぞ！

大きすぎる力

一刀達五人は洛陽に向けて旅を続けていた。

一刀「ずいぶん進んだな、次の町はあとどれくらいだろうか？」

稟「このまま進めば後少しでつくはずです」

星「やれやれ、はやく酒とメンマにありつきたいものだな」

風「星ちゃんはそればっかりですね～、そう思いませんかお兄さん？」

一刀「ああ、まったくだな」

月「本当にメンマが好きですね星さん」

一刀と董卓はすっかりこの三人と打ち解けてしまった。董卓は最初は少しぎこちなかったが今では笑顔を見せている。

月「あっ視てください、町が見えましたよ！」

一刀「本当だ後少しで着くな」

一刀達五人は急ぎ足で町に向かっていった

―町―

一刀達が町に着くと町とてもぼろぼろだった。

稟「なっ、一体何が…？」

趙雲「賊に襲われたのだろうか…」

一刀「とにかく生存者を探そう何があったのか情報がほしい」

一刀達は生存者を探すために村を探索しはじめた。

少したって董卓が

月「一刀さーん！こっちに生存者が居ましたよー！！」

一刀「！！　生存者が居たか！」

星「急ぎましょう主！」

一刀達は董卓が叫んだ辺りに急ぐ。そこには古びた寺院があった。

どうやらそこに生存者がいるようだ。

―寺院―

寺院の中にいた人たちは皆傷だらけでぼろぼろだった。

一刀「一体何があったのか教えてくれませんか？」

一刀が聞くと村人達は怯えたように話し始めた。

「い、いきなり変な化け物が襲ってきたんだ！　それで襲われた人達は牙が刺さって変な化け物に消されてしまったんだよ！！」

一刀「！！！！！！」

星「化け物だと？　それは本当か？」

村人の言葉を聞いて一刀は驚愕の顔をする。何故なら、化け物の特徴がファンガイアと同じだからだ。趙雲が疑問の言葉を投げ掛けるが、村人達は本当だと訴える。

一刀「（どうゆう事だ！？　この世界にもファンガイアは存在しているとでもいうのか！？）」

稟「その化け物は何処に行ったのですか？」

「わからねぇ…、いつの間にか消えていてよ…人間を餌だと思ってるのかも知れねぇ…」

「ギャアアア！！！！」

「「「「「！！！！！！！！！！」」」」」

いきなり村の外の辺りから悲鳴が聞こえてきた。

一刀「皆さんはここにいてください、様子を見に行ってきます！」

一刀達は悲鳴の聞こえてきた辺りに向かった。そこには、以前一刀と董卓を襲ってきた男の一人が必死に此方に向かってきた。

「助けてくれー！！！！！」

男は一刀達を見ると助けを求めた。しかし

「ギャアアア！！」

背中に牙が突き刺さり悲鳴をあげるその牙にライフエナジーを吸いとられて男は跡形もなく消滅する。

稟「き、消えた！？」

風「い、一体何が起こったんですか～！？」

郭嘉達は何が起こっているかわからなかったが一刀だけはわかっていた。

一刀「（間違いない！！　これは！！）」

「グワォォォ！！」

星「な、何だあの化け物は！？」

一刀達の前に一体の化け物が現れる。それは猿の体にステンドグラスの模様が着いていた。一刀は叫ぶその化け物の名を。

一刀「何故貴様らがここにいる！！

ファンガイア！！

」

歴史の変わった世界のにまた新たなイレギュラーが現れる。何故この世界にもファンガイアがいるのか？　一刀はこの世界で何をなすのか？　物語はまだ始まったばかりである…。

大きすぎる力（後書き）

次回は変身します。

お気に入り登録ありがとうございます！

その力は誰のために（前書き）

遂に戦闘ですがクオリティが低いです。
台本書きですがどうか視てください。
感想ありがとうございます皆さん！

その力は誰のために

趙雲達は戸惑っていた、いきなり猿のに似た化け物が現れたからだ。
その上その化け物の事を一刀が知っている事も彼女達が戸惑う原因にもなっていた。

一刀は焦っていた、何故この世界にファンガイアがいるのかまったくわからなかったからだ。

一刀「（くっ！　どうする？　このままでは月ちゃん達が危ない、一旦逃げるべきか！？）」

一刀が考えるが、その暇も与えずにモンキーファンガイアが襲い掛かる

モンキー「ライフエナジーヲ…ヨコセェェ！！」

一刀「くっ！　月ちゃん、星達と一緒に逃げるんだ！！」

稟「な、何を言っているんですか！」

星「そうですぞ主！　私も一緒に戦います！」

一刀は趙雲達に逃げるように言うが、彼女達は戦おうとする。

一刀「やめろ星！　人間はこいつには勝てん！」

月「なら一刀さんも逃げてください！　死んじゃいます！！」
風「お兄さん、此処は一度逃げるべきだと風は思うのですよ～」
一刀「こいつは人間では勝てない…人間ならな（……）」
月「えっ…？」
一刀は董卓達の前に立ち覚悟を決める。
変身する覚悟を……

一刀「こい！　ダーク！！」
ダーク「ふ、よかろう…ガブリ！！」

ダークが一刀の手に噛み付き魔皇力を注入する
一刀の顔にきらびやかな模様が浮かぶ。

一刀「変身」

一刀そう呟くと同時にガラスの割れるような音がなり一刀は闇のキバに姿を変える

星「な、一体何が…？」

風「お、お兄さんが」

稟「姿を変えた！？」

月「か、一刀さん…」

一刀の姿を見た董卓達は言葉が出なかった

一刀が変わった事にも驚いたが、それよりも一刀放った覇気にも驚いていた。

モンキー「バ、バカナ！　ソレハマサカ…」

モンキーファンガイアは一刀の姿を見て震え出す

一刀「喜べ…この俺自ら貴様を葬ってやろう…」

一刀はそう言って自分の足元に波動結界をはる

一刀「とらえろ」

波動結界がモンキーファンガイアを拘束しダメージを与える

モンキー「ギャアアア！！」

モンキーファンガイアは苦悶叫びをあげるが一刀は容赦はしなかった

一刀「ハァ！！」

モンキーファンガイアを引き寄せてタイミングよく殴り波動結界に叩き込む。

モンキー「ガハァ！！」

一刀はモンキーファンガイアを放り投げる

一刀「終わりだ…」

ウェイクアップフエッスルを取りだしダークに装着する

ダーク「ウェイクアップ1！！」

ダークが叫ぶと辺りは夜になり空に赤い満月が浮かぶ

月「へぅ！　い、いきなり夜に！？」

星「なにが起こったんだ！？」

董卓達はいきなりの出来事に何がどうなっているのかわからなかった

一刀「終わりだ…！」

一刀は満月を背にして飛び上がる

其処から渾身のストレートパンチを繰り出す

その名は

一刀「ダークネスヘルクラッシュ！！」

モンキーファンガイアはその一撃をもろにくらい吹き飛ぶ

モンキー「ギャアアア！！」

断末魔の声を上げモンキーファンガイアは砕け散った。

遂に変身した一刀。
この変身はこれから始まる絶望の始まりなのか？
それとも希望なのか？
それは誰にもわからない……

闇と月と龍達の絆（前書き）

すみません！！　ケータイを没収されていたせいで感想を書けませんでした。

感想を書いてくれた皆様まことに申し訳ありません。

評価されてる皆様もどうかこの作品を見捨てずに視てください！

闇と月と龍達の絆

前回のあらすじ

ダーク「洛陽に向けて旅を続ける一刀達の前にモンキーファンガイアが現れた。一刀は闇のキバに変身してそいつを倒すが、月達に姿を見られてしまったのだ……何故俺が説明しなきゃならないんだ…？」

気にするな、俺は気にしない　ｂｙ作者

―町―

董卓達は言葉が出なかった。一刀が変身した闇のキバの力を見たからだ

一刀「…無事かいみんな？」

一刀が変身を解きながら話し掛ける

月「一刀さん…その姿は一体？」

董卓が恐る恐る一刀に質問をする。趙雲達も頷き説明を求めた

一刀「…ただの化け物だよ…」

一刀はそう言って歩き出す、董卓達がいる反対の方向に

星「ど、何処に行くのですか主！！」

風「お兄さん！？」

趙雲達が一刀を追いかける

一刀「…俺はみんなを騙していたんだ…自分の事を言わずにみんなから真名を預かっていたんだ…そんな俺はもう……」

一刀は趙雲達に逃げるように背を向け再び歩こうとする

だが…

月「違います！！！！」

一刀「月、ちゃん？」

一刀は驚く、董卓が大声を出したのを初めて聞いたからだ。

しかし、そのあとの言葉にもっと驚いた

月「一刀さんは…一刀さんは化け物なんかじゃありません！　だって一刀さんは私を助けてくれるって言ってくれました！！　化け物なんかじゃありません！！」

董卓が叫ぶと他の三人も

星「その通りですぞ主！　これまで一緒に旅をしてきましたが、貴

方は化け物などではありませぬ！」

風「お兄さんは化け物なんかじゃありませんよ～、お兄さんはお兄さんですよ～」

稟「一刀殿、本当に化け物だったら私達は今頃死んでるはずですよ、違いますか？」

三人も自分の思いを打ち明ける

一刀「…この姿を見てもそんなことが言えるかい…」

月「えっ…？」

一刀は董卓達にそう言うと自らの体をファンガイアに変身させる。

一刀はインセクトクラス最強のファンガイアであるヘラクレスファンガイアに姿を変える。

ヘラクレス『これが俺の姿だ…化け物だろう…？』

一刀は皮肉げに笑いながら董卓達にそう言った

一刀は彼女達はこの姿を見れば自分を恐れるだろうと思ったのだが

ドン！

ヘラクレス『な！！』

董卓達は一刀に抱きついてきたのだ。それもファンガイアの体である一刀を

月「一刀さんは化け物じゃあありません…」

星「その通りですぞ主」

風「どんな姿をしてもお兄さんはお兄さんですよ〜」

稟「自分の事を化け物などとは言わないでください」

董卓達は一刀の姿に怯えることなくむしろはなさないように力を入れて抱きしめる。

一刀は人間態に戻り四人に聞く

一刀「俺は…みんなといていいのかな…？」

一刀は恐る恐る聞くと四人は

「「「「もちろん！！」」」」

一刀その答えを聞き四人を抱き締め返す

一刀「ありがとう…みんな」

四人は顔を赤くしながら頷いた。

一刀は四人を抱きしめ続けた

稟が鼻血をだしてしまままでは…

一刀は四人の少女達の間に固い絆を結んだ
この絆はこの先何があっても壊れることはないだろう…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5683x/

舞い降りた黒き牙

2011年11月22日01時58分発行